

**財団法人鍋島報効会研究助成
研究報告書 第1号**

2004年1月

財団法人鍋島報効会

目 次

高鍋圭子「幕末期の輸出磁器—その背景と日本磁器近代化への関与—」	1
佐賀県立伊万里高等学校 生物部	
「カブトガニ研究報告・伊万里高校内のアリの分布調査」	31
高瀬哲郎「歴史遺産にみる佐嘉藩の土木技術について	
—佐嘉城築城を原点として—」	51
野口朋隆「鍋島家の親族組織に関する基礎的考察」	77
第1回研究助成による研究報告の講評	85
佐賀大学名誉教授 米倉利昭先生	
東中川忠美「二彩・単色釉・刷毛目・三島手の再検討」	87
中村知裕「中世有明海における港津と水上交通」	107
佐賀自然史研究会「佐賀平野および有明海の生物相調査」	117
佐賀県立佐賀北高等学校 地学部「酸性雨の研究—降雪雨の酸性度予報—」	133
第2回研究助成による研究報告の講評	143
九州大学名誉教授 菊竹淳一先生	
編集後記	

幕末期の輸出磁器

— その背景と日本磁器近代化への関与 —

コペンハーゲン大学修士課程

高 鍋 圭 子

Export porcelain in the last days of the Tokugawa regime

— Its background and relation to modernization of Japanese porcelain —

Keiko TAKANABE

序 文

日本の輸出磁器の中で最も知られているものは、17世紀の半ばから18世紀の半ばに、世界中に送り出された有田磁器であろう。有田磁器は、作り始められて間もなく鍋島藩の殖産興業として庇護と制約の中で急速に輸出された。それは、中国での政変が原因に中国磁器の輸出が途絶えたためと説明される。有田の磁器輸出は、中国磁器の輸出が再開されると終局を迎えるが、その頃には日本での磁器普及が本格的になり、有田磁器は国内市場に向けて生産転換がなされた。

その後、開国に及んで磁器製品は、絹と茶に次いで日本の重要な輸出品となり、明治時代に設立された磁器会社は、新政府の経済援助を受けながら輸出磁器の製造に携わった。それと同時に、万国博覧会への出品にも力が注がれ、西欧の展示場には名声を博した日本近代磁器が多く飾られた。

それらの輸出磁器に関する学術的関心は深く、また日本を去った輸出磁器の品々は、時を追って世界各地でみつけ出され、《里帰り》を果たし、今日多くの美術館や各種の陶磁器資料館に収められている。特に近世の有田輸出磁器がヨーロッパの磁器に及ぼした影響は大きく、その綿密な研究は長期に渡って国際的に行われている。

近代での輸出磁器というと、明治初期の万国博覧会出品作やその時期に創立された磁器会社の磁器製品などが著名だ。しかし、その輸出が再開された当初の磁器については、あまり知られていないように思われる。近代における磁器輸出の背景が研究課題にされることもまれで、有田磁器の輸出が、明治維新以前に再開されたことを知る人も少ないかもしれない。近代の輸出磁器は、近世の磁器輸出が途絶えた後に製造されたもので、言ってみると《再輸出磁器》であるが、この再輸出磁器の製作は驚嘆に値する背景の下で展開されていた。

最初に磁器の輸出が再開された年は1841年である。オランダの連合東インド会社（VOC）が有田磁器の輸出から手を引くのが1759年であったので、その後に私貿易があったとは言え、幕末期の磁器の再

カブトガニ研究報告・伊万里高校内のアリの分布調査

佐賀県立伊万里高等学校 生物部

カブトガニ研究報告

1. はじめに

カブトガニは約3億年前からほとんど姿を変えずに生息しており、生きた化石といわれています。現在世界に3属4種が生息しており、いずれの生息地も楽観できない状況で、その保護が叫ばれています。特に日本においては、度重なる護岸工事や水の汚染などの自然破壊により、急速にその数を減らしています。カブトガニ博物館を有する岡山県笠岡市はほぼ絶滅状態であり、カブトガニの産卵地として有名な山口県、福岡県北九州の曽根、大分県の杵築、そしてここ伊万里でも産卵にくる番数は減少傾向にあります。

今年度は、伊万里高校生物部は十数年間続けてきた来浜番数調査および幼生生息調査の継続と、水槽内での番行動および幼生の行動の観察をテーマに研究してきました。その結果について発表します。

2. 来浜番数調査

(1) 材料と方法

産卵番数調査は、7月～8月、満潮時に多々良海岸に出かけ、その数を記録するといういたってシンプルなものです。調査自体は簡単なのですが、調査地となっている多々良海岸は自転車で20分ほどかかりますし、1日2回の満潮時に欠かさず計測に行くことは非常に根気がいります。また、満潮時が授業中や深夜に重なる際には顧問の力を借りて計測を行いました。今年度は



歴史遺産にみる佐嘉藩の土木技術について

－佐嘉城築城を原点として－

佐賀県立名護屋城博物館

高 瀬 哲 郎

1. 佐賀県内の土木構造物

県内に残る主な歴史的構造物（特に、立体構造物）を時代を追って探ってみると、支石墓・古墳・神籠石・朝鮮式山城・中世山城・近世城郭・水利施設（堤防・堤・水路など）・眼鏡橋など、その地域に生きてきた人々に密接に関わる事象が多くみられる。しかも、これらの構造物を配置するにおいては、その土木作業の膨大さや費やした人員・期間などを想定すると、単に「一個人」の行為というよりも、地域の「集団」としての行動がその背景になくは構築され得ないことは明らかであり、まさに「地域史」を語るうえでのそれらが占める重要性はかなり高いと思われる。また、現実的な問題として、それらを構築するにおいては、ある意味での一定のレベルに達した「技術」「技法」が、当該の地域に保持・導入されていることも当然の如く必要である。

つまり、ある地域のなかに行動を起こす「契機」とともに、それを造る「技」そのものがなくては、これら構造物の存在がありえなかった点を十分に認識しておかなばならない。では、その「技」がどのような系譜をたどって、この地域に伝来しているのかということが次の課題となろう。例えば、これらの歴史を形成してきた諸事象がひとつの地域のなかで自然に発生したものなのか、あるいはこの九州、さらに日本全体の影響を受容していくなかで伝えられ、そして、発展していったもののかなどの点も検討されなければならない。

そこで着目したいのが、それら構造物を構成する主な素材のなかで、「土」・「木」でなく、「石」である。それは、「土」や「木」の構造物が容易に改良・改造そして運搬もしやすいのに対し、「石」はそれ自体にかなりの「重量」と「強固さ」を伴うことから、その切り出し・搬出そして構築に相応の「動員」・「技」を必要とし、さらに、何らかの事情でそれらを当初の形状から改変するにおいても、再び、地域全体のなかでそれなりの「動員」・「技」を繰り返さなければならない点を重視すると、ひとつの地域行動を起こすには強い「意識」がはたらくと考えるからである。特に、石を積み上げて構築するには様々な技を駆使していること、そのうえ、その時々における構築技法（石材の加工・積み方など）に何らかの変化が存在することは各地の事例からも確かであり、それらの変遷を把握することでひとつの地域史をたどることも可能となってくるのではないだろうか。

その代表的な事例が、県内最大規模の（石造）土木構造物のひとつとして知られる「佐嘉城」と考える。いうまでもなく、「佐嘉城」は「佐嘉藩」の中心を為す施設であり、藩の動静（政治的理由や自然災害など）とともに長らく維持されてきた経緯をもっていることから、各々の時代を反映した「技」の変遷を追うことも可能ではないだろうか。ここでは、そのような大規模な石造構造物を順に紹介していく

「鍋島家の親族組織に関する基礎的考察」

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

野 口 朋 隆

1. 研究の目的

近世社会は、「家」を基本的な単位としたところにその特色があるが、これは大名家においても例外でなく、家臣団を擬制的な家族とする政治的・経済的・社会的団体としての「御家」として展開していった。こうした近世大名家の「御家」について、報告者はこれまで鍋島家の本家・分家関係（本支藩関係）を素材として若干の考察を行ってきた¹。三家と呼ばれた分家（小城・蓮池・鹿島各鍋島家）は、幕府とも関係を持っていたことから、本家にとってはその統制が難しくなる危険性を有していた。そのようななか本家・分家関係において、両者を結ぶ媒介として、婚姻という関係が重要な位置を占めていることに気が付いた。しかし、その具体的な在り方については、これまで先行研究も少なく²、検討の余地が大きく残されているものと思われた。

そこで、本研究では、まず鍋島家の婚姻関係について通時的把握を行うとともに、近世大名家における婚姻の持つ意義が時代によってどのように変化していったかについて、以下の点に注意しながら明らかにすることを課題とした。

①婚姻関係を取り結ぶ大名家を検討するにあたって、大名家の一般的区分である外様、譜代によって、婚姻することの意義がどのように異なるのか、また、時代による差異はあるのか、②三家と他家との婚姻関係は本家によって禁じられていたが、三家は他大名家と全く縁組を行わなかった訳ではなく、少ないうちにも婚姻を行った事例があるので、この分析を行う。

まずは、本家の婚姻関係について、正室と子女の嫁ぎ先について概観し、近世中期における婚姻の事例として本家と井伊家の婚姻について取りあげたい。次に三家の婚姻関係について概観し、最後に三家の婚姻に関する具体的事例として、小城鍋島家（以下小城家と略称する）と譜代大名の三浦家、同じく小城家と水戸徳川家の附家老中山家との婚姻について検討を行いたい。

2. 正室の出身について

まず、江戸時代における鍋島家（本家）と他大名家・公家との婚姻関係について、治茂代までみてみることにしたい。これを示したものが【表1】である。正室について、勝茂は徳川家（実は岡部家）、忠直は奥平家、光茂は上杉家（継室は越前松平家〔越前福井〕）、綱茂も光茂と同じく越前松平家から迎え

第1回研究助成による研究報告の講評

佐賀大学名誉教授 米 倉 利 昭

平成14年7月14日に開催された研究報告会では、それぞれに力のこもった発表があった。会場で私なりの感想は述べたが、すべてが私の専門領域とはいえず、発表者の研究の一助になりえたかは疑問である。ここに改めて記すことで、何らかのお役に立てばと思う。

1. カブトガニ研究報告・伊万里高校内のアリの分布調査

佐賀県立伊万里高等学校 生物部

<評>

- ・伊万里高等学校生物部が、長年にわたりカブトガニの生態調査に取り組んでこられた熱意と、先輩達の仕事をしっかり受け継いだ伝統、更には学校をあげての取り組みに、先ず敬意を表したい。
- ・報告書の体裁としては、読む人のすべてが伊万里湾の地形に精通してはいないので、巻頭に地図・産卵場所を図示してほしかった。
- ・図(2)の16年間の来浜番数の表は面白いし有意義であった。また、予想と確認の数を基にした考察は、多くのヒントが隠されているように思う。
- ・調査時間の空白を埋める方法として、海岸周辺の人話が載っているが、その人達からの聞き取りの数を、もっと増やしてほしい。そうすれば、調査の空白を埋めるだけでなく、報告に厚味が加わる。
- ・水槽内の番行動を通しての「抱接行動」の頻度と時期に対し、仮説を提示しての実験観察は、ぜひ継続してほしい。
- ・民俗芸能の保存継承に取り組んでいる私からの希望であるが、研究の継続を切望したい。同時に、調査結果を今後の保存に生かすために、学校だけではなく、地域や行政の人達の、全面的な支援と協力を強くお願いしたい。

2. 歴史遺産にみる佐嘉藩の土木技術について

—佐嘉城築城を原点として—

佐賀県立名護屋城博物館 高 瀬 哲 郎

<評>

- ・名護屋城博物館員の精力的な研究については、日頃見聞していて、その努力に対し心から敬意を表したい。

二彩・単色釉・刷毛目・三島手の再検討

佐賀県教育委員会文化課

東 中 川 忠 美

1. はじめに

肥前の陶器生産は16世紀後半から末頃に開始され、文禄・慶長の役（1592～1598年）を契機として各地に多くの窯が築かれるようになっていく。このような中で二彩・単色釉・刷毛目・三島手は、斑唐津や絵唐津より遅れて17世紀になってから生産が開始される。まず、朝鮮半島から刷毛目や三島手の技法がもたらされ、それを基礎に銅緑釉をはじめとする単色釉そして二彩の技法が広がっていく（註1）。

このレポートは近年の発掘調査の成果を参考にしながら、佐賀県下における二彩・単色釉・刷毛目・三島手の主要窯跡と、そこで焼かれた製品について検討するものである。

2. 二彩・単色釉・刷毛目・三島手を焼いた窯跡の分布概要

窯跡の全体分布図はPL1、窯跡一覧は表1（94頁）のとおりである。時代的には刷毛目・三島手～単色釉（中でも銅緑釉）・二彩という変遷をたどるが、ここでは17世紀の唐津系陶器を代表する二彩から説明していくこととする。

（二 彩）

二彩は大皿や鉢、甕等の大物にその特色が活かされている。素地に白土を塗布した後、絵唐津に極似する丁寧な鉄絵を描き銅緑釉で彩色するタイプ（PL2-1）が17世紀前半頃から、刷毛目を駆使して鉄と銅を柄杓掛けするタイプ（PL2-2）がそれより少し遅れて生産されるようになる（註2・3）。

二彩を焼いた窯場の多くは武雄市内に集中する。武雄南部では小田志、庭木一帯の白木原1号窯跡（PL5-1 註4）、2号窯跡（註5）、釜の頭窯跡（註6）、土井木原窯跡（PL5-2 註7）、新立山窯跡（註8）、檜ノ木山窯跡（註9）、弓野窯跡（註9）等が、武雄北部では川古窯の谷上窯跡（註10）、焼ヶ峰2号窯跡（註9）、大谷窯跡（註9）等がある。武雄市近郊では山内町百間窯跡（註11）、嬉野町内野山北窯跡（註12）、伊万里市椎ノ峰上（註13）・下窯跡（註14）等がある。これらの窯跡は17世紀を中心に盛んに生産を行い、弓野窯跡では江戸時代を通じて二彩の生産を続けている（註15）。17世紀末から18世紀以降になると塩田町志田西山1号窯跡（註16）、武雄市橘町上野本登窯跡（註9）、伊万里市瓶屋窯跡（註17）等でも二彩を焼くようになる。

中世有明海における港津と水上交通

福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程

中 村 知 裕

1. はじめに

近年、中世における都市や流通の問題を考える上で、陸上・水上交通の解明が不可欠なものとなっている。特に水上交通については中世東国を中心として研究が盛んに進められており、その結果、中世の海や河川は物資の輸送を円滑にするとともに、地域と地域、都市と都市、都市と地域を結びつけるなど地域経済を活性化するものとして理解されるようになった⁽¹⁾。

本稿で研究対象とする有明海は現在の福岡・佐賀・長崎・熊本県にまたがる内海で、干満差の大きな海水域として知られている。これまで古代・中世の有明海に関しては、次の二つの視点から研究が進められてきた。一つは、平安末期に宋人の「周新船」が肥前国「神崎御庄領」に到着したという藤原師時の日記『長秋記』長承二年（1133）八月十三日乙未条の解釈をめぐる、宋船が有明海を通してその最奥部に位置する神崎荘に入港することができたのか、それとも博多に所在する神崎荘倉敷地、博多津に到着したのかという問題についてであり⁽²⁾、もう一つは鎌倉期に肥前国川副荘や肥後国飽田郡南郷といった有明海沿岸地域で行なわれた干潟開発事業の実態についてである⁽³⁾。

これに対して、近年では中世有明海でも水上交通についての研究が行なわれるようになった。例えば、服部英雄氏は、宋船が有明海を通して直接神崎荘に入港することが可能であることを示す根拠の一つとして、明の時代に中国で編纂された地理書の記述から、水上交通の拠点である港津が有明海に多数存在していたことを明らかにしている⁽⁴⁾。また鈴木敦子氏は、イエズス会宣教師の報告書を使用しながら、戦国期有明海における戦時での兵船動員のあり方や海上ルートを解明するなど⁽⁵⁾、服部・鈴木両氏は日本の史料ばかりでなく、外国の史料も駆使した研究を行なっている。

今後、有明海における人々の活動や水上交通の様子をより理解していくためには、近年の研究で行なわれているように、流通との関係を明らかにしていかなければならないであろうが、そのことを示す史料があまり残されていない。そのため中世有明海の場合は流通以外の視点からも合わせて考察を進めていく必要があるだろう。

そこで本稿では、有明海における軍事活動の状況やキリスト教宣教師の動向を明らかにしていくと共に、こうした活動を行なう上で有明海の港津がどのような機能や役割を果たしていたのか考察していくことにしたい。

佐賀平野および有明海の生物相調査

佐賀自然史研究会

1. はじめに（研究の動機）

有明海には干満差 6 m を誇る日本最大の干潟が広がっている。干潟や海中には実に多様な生物が息づき、世界でここだけあるいは日本でここだけという貴重な生物もたくさん知られている。干潟の生物の物質生産量は熱帯林に相当するとも言われ、良好な環境を維持するのにきわめて重要な働きをしている。生物が干潟の環境を守り、干潟が海を守り、海が生き物を守るといった相互作用、循環を見ることができる。世界に誇る貴重で独特な生態系が成立している場所である。

佐賀平野は嘉瀬川水系、六角川水系、筑後川水系がもたらした土砂により形成された沖積平野で、有明海干潟の干拓により拡大してきた歴史を持つ。しかし、平野部の広大さに対して水源となる後方の山塊は小さく、不足する農業用水を確保するために総延長 2000 km を超えるクリークが造成された。人間が作った水田環境も含め、広大なウェットランドの成立である。その中には社寺林、屋敷林、草刈り場等がモザイク的に配置され、里地と呼ばれる農村生態系が形成された。そのような環境の中に、水草、淡水魚、昆虫類等多様な生物が住みついた。

有明海と佐賀平野は地史的にも深い関連性があり、それぞれの生態系を繋ぐ生物も知られている。これらは、ひとまとまりの系として佐賀県がそして日本が誇る自然と言っても過言ではない。本研究は、このような貴重な自然を調査・研究し、生物的な構造や重要性を明らかにすることを目的として行った。

佐賀自然史研究会は佐賀県内の生物に関する調査・研究を行い、それを確実に記録していくことを主な目的として 1993 年 10 月に設立された。2003 年 10 月で丸 10 年となるのを記念して、「佐賀平野と有明海の生物」をテーマに研究会誌記念号を発行することになっている。本報告書はそのエッセンスをまとめたものである。詳しい報告書（会誌記念号）は別途作成する予定である。本研究が、有明海と佐賀平野の生物相・生態系の貴重さ・重要性を地域の人に広く知ってもらうことに役立ち、それが地域の自然を守ることにつながることを期待している。

2. 調査エリアの考え方

本研究では、佐賀平野を筑後川より西の、面として連続的につながった地域と定義した。鳥栖市から武雄市、鹿島市、そして多久市の一部が含まれる。調査対象は、植物、ほ乳類、鳥類、爬虫類、両生類

酸性雨の研究

—降雪雨の酸性度予報—

佐賀県立佐賀北高等学校 地学部

1. はじめに

佐賀北高校地学部は毎日欠かさず気象観測をしています。それは一日単位では気が付かないことも長期的に見てみると何らかの発見があるからです。

私たちは13年間もの北高の屋上での観測結果をもとに、3年に渡って佐賀市内における酸性雨の研究をしました。

2. 地学部理論

酸性雨の降りやすさは、大気汚染物質が拡散しやすいか、滞りやすいかにより決まる。

また、その大気の構造は、

- ・前線のかたち（南北にのびているか、東西にのびているか）
- ・前線からの距離による冷たい空気の厚さの変化

の2点によって決まると思われる。

しかし、今まで実際の大気汚染物質の広がり方については研究していませんでしたので、今回は「大気汚染物質の広がり」と「酸性雨」・「前線の位置」について調べました。

3. 酸性雨の説明・測りかた

(1) 酸性雨とは何か

正常の雨には、普通空気中の炭酸ガスが溶けているため、中性であるpH7.0よりも少しだけ酸性に近くなっています。それよりも酸性の強いpH5.5以下の酸っぱい雨のことを「酸性雨」と呼んでいます。

酸性雨は、硫黄酸化物や窒素酸化物などの大気汚染物質が何らかの原因で雨の中に溶け込んでできるものです。

第2回研究助成による研究報告の講評

九州大学名誉教授 菊 竹 淳 一

平成15年7月13日に佐賀県立図書館で開催された第2回研究報告会は、それぞれの研究者たちが、研究成果を熱心に報告し、会場を埋めた聴衆者たちとの真摯な質疑応答をおこない、鍋島報効会による研究助成が地元の人々に強い関心と支持を得ていることに強い感銘をうけた。

評者は、4つの報告内容のすべてにわたって専門知識を持ち合わせぬことから、この講評内容が随分と見当違いや迂闊な内容を多く含んでいると考え、篤い寛恕をお願いする。ただ、この評が研究助成者たちの今後さらなる研究発展に微力ながらも役立つことがあればと、ここに概評を記すこととする。

1. 二彩・単色釉・刷毛目・三島手の再検討

佐賀県教育委員会文化課 東中川 忠 美

<評>

- ・東中川氏の研究は、近年の佐賀県下における発掘調査の成果を参考としながら、二彩・単色釉・刷毛目・三島手の主要な窯跡とそこで焼成された製品について考察したもので、肥前陶器史研究における実証的立場を堅持した注目すべき研究成果といえる。
- ・この研究は、肥前の主要な窯跡からの発掘品を研究対象としているため、肥前陶器を製作した生産者側からの考察が中心となっており、肥前陶器を使用した需要者側からの観点に欠ける傾向がある。発掘陶片とともに、完形品との対照研究により、生産者と需要者との関係をあきらかにすることが今後期待される。
- ・さまざまな技法を駆使した肥前陶器が、点前茶より独創性に富むとされる道具茶に多く使用されていくことを考慮して、肥前陶器の日本茶陶史における新しい位置づけが、本研究の成果を基礎にして必要であろう。
- ・肥前で創造された陶器類が、日本各地へどのように伝播しいかなる影響を及ぼしたかの追求も今後の課題として発展することが俟たれる。
- ・本研究で得られた成果は示唆に富み、これからの日本陶器史研究に大きく寄与するものと確信する。それだけに、本研究で得られた資料等の早急な一般への公開が期待される。

編集後記

平成13・14年度に提出された研究報告書を一冊に纏めるにあたり、報告者の方々に種々注文をつけてご迷惑をおかけしました。一冊の印刷物にするためには仕方がないことかもしれませんが、分量や多数の詳細な図表や、その図表の色彩表現など、報告書として提出されたとおりの形にすることができず、又本文中の年月日等の数字の表記につきましては多分野に亘り統一を図りえませんでした。

一方、報告者の方から、印刷物になり広く研究内容が公開されるならば、いますこし詳細に書き込みたい、または一部修正を加えたいということで、再度検討をしていただいた方もあります。このような研究報告書にかかる責任ある取り組みが大きな力となって、わたくしども編集子にせまってきて、改めて研究報告者の真摯な姿勢が窺われました。

最後に、大変ご多忙なところ都合をつけてご出席いただき、研究報告会に懇切な講評をいただいた佐賀大学名誉教授米倉利昭先生、九州大学名誉教授菊竹淳一先生には、講評内容を適切にまとめた玉稿をいただき、本冊子の学問的価値を高めていただきました。改めて謝意を表します。

財団法人鍋島報効会研究助成
研究報告書 第1号

2004年1月

発行 財団法人鍋島報効会
佐賀県佐賀市松原二丁目5-22
TEL/FAX 0952-23-4200
URL:<http://www.nabeshima.or.jp>
印刷 (株)佐賀印刷社
